

キャンパスライフ ゼミ紹介

見て、経験して、考える

身体文化専修 石川研究室

四年 大山 奈央

身体文化専修には六つの研究室があり、その中の石川研究室では主に「保健体育のよい授業とは？」について学んでいます。そのため、将来教員志望の学生が多く所属しています。

三年次には、まず、文献を読んだり授業の映像を見たりし、体育のよい授業のポイントをおさえました。その後、学んだことを活かして一人一人が模擬授業を行いました。選択した領域や対象学年はそれぞれ異なるため、教員役以外の学生は児童・生徒役として、多様な種目の授業を体験することができました。そして、各模擬授業後には、良い点や改善点を出し合い、よりよい授業に向けて再度熟考しました。

四年次には、卒業論文の執筆に取り掛かりました。まずは保健体育の授業に関する題目を各々決め、五月から執筆に向けて調査を開始しました。研究の目的や読んできた先行研究などについて毎回の授業で報告し合い、質問やアドバイスをし合いながら研究の内容を定めていきました。また、前期には教員採用試験の勉強もゼミ生同士、励まし合いながら行いました。面

接練習をしたり、問題を出し合ったりしながら切磋琢磨し、目標に向かって突き進みました。

特に三年・四年の二年間を通して、石川先生に同行し、県内小・中学校の研究授業に数多く参加することができました。現職の先生方がどのような授業を行っているか、子供たちはどのようなように授業に取り組んでいるのか等を見て学ぶことができました。

このゼミの魅力は、一人一人が主体的に取り組む姿勢をもったうえで、仲間と高め合うことができるところです。見たもの、経験したものをそのままにせず、そこから良い点や改善点を考え、仲間と共有しています。そのため、自分の考えや価値観を広げたり、授業づくりの引き出しを増やしたりすることができず。また、ゼミ以外でも保健体育講座の先生方から手厚いご指導をいただくことができ、学べることは非常に多いです。

目標としてきた教職に近い将来就いた時には、ゼミで学んだ授業づくりや声掛け等を活かすとともに、日々学び続け、子供の実態に適したよい授業を行っていききたいと思えます。



アートワークシヨップを通じて 芸術専修 美術分野 石上研究室

四年 赤沼 浩太

石上研究室では様々なアートワークシヨップに取り組んでいます。そのため研究室に入ると、もれなくそのお手伝いをする事になります。そこで本稿では先日行った「埼玉・藝大協働プロジェクト『サイトシーング・バスカメラ』によるカメラ空間体験バスター」の様子を紹介していきます。

この取組は「さいたま国際芸術祭二〇二三」の企画の一つで、さいたま市在住のアーティスト佐藤時啓さん(東京藝術大学教授)が中心となっており、埼玉大学と東京藝術大学の学生が協働して実施したアートワークシヨップです。内容はピンホールカメラの原理を用いてバス自体がカメラとなったバスカメラによるツアーと、その原理を理解するために段ボール箱で簡単なピンホールカメラを作る活動の二部構成となっています。

バスカメラとは、目張りして中を真っ暗にしたバスに、小さなレンズを通して外光が入るようにし取り入れた光がバス内部に張ったスクリーンに当たることで、外の景色が上下逆さまな映像として映し出される仕掛けです。更にバスが走行することで映像が動画とな

って進行方向と逆に動き出します。映し出される映像が逆さまな状態で動くことで、とても不思議な感覚に襲われました。特にバスが曲がる際には、更に面白い動きを見せるので、より多くの方々に体験してほしいと思いました。

続く創作活動では段ボール箱と虫眼鏡を使ってピンホールカメラを作りました。箱の外側に虫眼鏡を固定し内側に半透明の紙を張ることで、そこがスクリーンとなり外の景色が映し出されます。人によつては段ボールの外側にデコレーションをして、各々オリジナルのカメラを作っていました。参加者は大人から子供まで多岐にわたつていて、それぞれが思い思いの楽しみ方を満喫していました。

手伝った私たち(大学生)は、添乗員としてバスカメラの解説を行いながらツアーに同行したり、段ボールがうまく加工できない子供たちへの支援をしたりしました。東京藝術大学の方々とは初対面でしたが、すぐに打ち解けて一緒に活動することができました。

このように石上研究室ではアートワークシヨップ等の活動を通じて、様々な人々との交流を果たしています。それぞれが多様な活動で一筋縄ではいきませんが、何れも教員としてのスキルを磨くよい機会となつているように感じています。

